

世界初 デジタル最新技術で原寸大に再現

至宝「日本の絵巻物」完全復刻シリーズ

秋山光和 監修

国宝

伴大納言繪

第三回配本

全三巻セット



刊行のことば

村田誠四郎

丸善株式会社 代表取締役社長



絵巻物は日本が生んだ特有の美術様式で、詞書と絵によって展開するその独特の世界は、美術史的にも文学史的にも宗教史的にも風俗・生活史的にも貴重な存在です。

絵巻物はまた、絵と文章による複合芸術であり、時間性とストーリー性をもつた絵画です。それは、今日隆盛をみていくるマンガ、アニメーションの源流ともいべきもので、絵巻物はきわめて現代的な興味の対象でもあります。とりわけ「異時同図法」「吹抜屋台」といった表現方法は、マンガやアニメーションの表現法の先駆をなし、コンピューターグラフィックスの映像表現にも影響を与え、世界的にも注目を集めているところです。

絵巻物は、美術館、神社仏閣、大学、個人等において貴重な美術品として厳重に保管されており、特別陳列を除けばほとんど公開・展示されることはありません。特別陳列も海外において開催されることが多く、国内ではその機会に乏しいため、さまざまな観点から鑑賞されるべき絵巻物にふれることは事実上ないに等しいのです。学術用として、鑑賞用として、より身近に、手にとれる原寸大の複製品あるいは復刻品が大いに求められるところです。

戦前から一部の名作絵巻物の複製・復刻はなされていますが、モノクロ図版や縮小版が多く、学問研究や美術鑑賞に耐えるものではありませんでした。また、多くの場合、冊子本のかたちで紹介されており、左手で開き、右手で巻きながらストーリー展開を追い、かつ鑑賞するという、絵巻物本来の醍醐味が失われておきました。

このたび、最新のデジタル技術を駆使して豊かな絵巻物の世界を再現する、日本の絵巻物・原寸大復刻シリーズを刊行する運びとなりました。筆遣いの息吹さえも感じさせる高いクオリティの復刻と、巻物を開き広げ巻き込みながら鑑賞できる巻子本により、絵巻物の神髄を伝えることができるものと確信しております。

二十一世紀を迎えた今日こそ、日本独自の文化遺産である絵巻物を完全に復刻する好機と考え、新しい文化事業として、当社の全力を挙げて刊行してまいります。

六大特色

代表的絵巻物を網羅

美術ならびに歴史の分野において専門書や研究書、あるいは大学・短大の教科書・教材において掲載度の高い国宝クラスの絵巻物を選んで復刻。

高品質な印刷

最新のデジタル印刷技術と日本の伝統的な職人芸の融合により、内容豊かな絵巻物の世界を忠実に再現。バガス紙（中性紙）と耐光性の強いトナーを使用することにより、従来にないインクのテクスチャと抜群の色彩効果を実現。半恒久的な保存が可能。

優れた印刷効果と耐光性

世界初の絵巻物用画像つなぎソフト（トップパン・フォームズと三洋電機との共同開発）により、何メートルにもわたる絵巻物を一枚の用紙に同時印刷することが可能に。実物にもない視覚効果と機能性を実現。

「貼りつなぎ」なし

原物を忠実に再現しているので、左手で巻き広げ、右手で巻き込みながら鑑賞する絵巻物本来の楽しみ方を実現。

実物と同じ巻子本

それぞれの美術館の学芸員、専門の美術史家による解説。歴史資料文献としての価値も多大。

詳細な解説書付き

監修者のことば

秋山光和



日本の美術にとって、絵物語・物語絵などと呼ばれたいわゆる絵巻物が、大きな役割を果し続けたことはいうまでもあるまい。

「画卷」と呼ばれたこの形式が、他の諸文化と同様中国からもたらされたことは勿論であるが、すでに平安時代初期、九世紀末にはまず中国の物語を和文化した「長恨歌の絵巻」などが作られている。また日本での各種の説話や伝承を絵画化し、詞に絵を続けて絵巻の形としたものが作られたことは、二人の男に求婚された末、生田川に身を投げて自ら命を断つたという生田川処女（おとめうばら）の哀話を絵画化し、さらに見る者がこれに歌を添えた由を記述した「かかる事どもの昔ありけるを、絵にみなかきて、故后の宮（宇多天皇中宮、八七二一九〇七）に奉りたりければ」とある『大和物語』の一説からもうかがわれる。

この九世紀末から十世紀にかけての物語絵の内容を大別すれば、『竹取物語』のような民間伝承を母体としたものと、『落窪物語』『うつぼ物語』など創作的な主題によるものとに分けて考えることも出来よう。そしてかの『源氏物語』「絵合」の巻には源氏方の『竹取物語』絵巻に対し、弘徽殿方からは新造した『うつぼ物語』（俊蔭とうけい）が提出され、それは飛鳥部常則（あすかべつねり）が絵を描き、能書家として知られる小野道風（おののとうふう）が詞を書いたことまで記されている。

そのほか『土佐日記』の絵、『住吉物語』の絵なども十世紀の文献にはさまざまに見ることが出来る。なお現在では詞しか伝わらないが、永觀二年（九八四）にすぐ

れた文人源為憲が冷泉天皇の皇女尊子内親王の為に仏教に關係ある説話を集めた「三宝絵」も当初はかなり複雑な物語を絵画化した絵巻であつたと推定しうる。

一方、私達が床（当時は置置）の上で絵巻を拡げて鑑賞する際、左右の手の間隔は八〇センチ前後が適当と思われる。

この点をよく示している絵巻の例は、十三世紀初めに高山寺で作られた「華嚴宗祖師絵」六巻であろう。新羅の僧元曉と義湘が龍の助けによつて荒海を渡り中国に渡る物語であるが、場面の変化はほぼこの長さに対応している。

また現存の絵巻では最古と思われる『源氏物語繪』にしても、すでにこの物語が紫式部と呼ばれる宮廷女房によって創作された十一世紀初頭には彰子中宮の為に絵巻化されていたかとさえ推定されている。

現存のこの絵は保存のため詞と絵の境目に当る紙を巧みに分離し、桐箱に納めて徳川美術館と五島美術館とに保存されている。しかしその総量はほぼ当初の四分の一と考えられ、その他に詞のみの断簡十種ほどと、江戸初期に一部補修しつつ切断された「若紫」の図を擧げることが出来る。

何れにせよ、最初に刊行される『平治物語繪』をはじめ、『源氏物語繪』以下『信貴山縁起繪』『伴大納言繪』など重要な絵巻類が原寸原色の巻子形式で復刻発行されるという企画は、私にとつても何よりの欣びであり、美術の研究者並びに愛好家への貢献といわねばなるまい。

秋山光和（あきやま てるかず）

大正7年（1918年）京都市に生まれ、間もなく父祖の故地東京に移る。

昭和16年東京帝国大学文学部卒業、文学博士、東京国立文化財研究所を経て東京大学文学部教授。

昭和54年学習院大学教授。専門は日本の古代中世美術史であるが、中央アジア、敦煌絵画をも研究。

東京大学名誉教授

日仏会館副理事長

フランス学士院客員会員

ブリティッシュ・アカデミー客員会員

主な著書に

『平安時代世俗画の研究』（1964年 吉川弘文館）、『王朝絵画の誕生』（1968年中央公論社）、『絵巻物』（1975年 小学館）『日本絵巻物の研究（上下）』（2000年 中央公論美術出版）、『La Peinture Japonaise』（1961年 スイス・スキラ書店、英・独語版も同時刊行）など。

伴大納言繪

出光美術館蔵

◎十二世紀のアナログ表現

近年、美術の世界においても、アナログとデジタルという用語が類比的に使用されていますが、記号化された情報が分断的に活用され、視覚化されるのがデジタル表現とすれば、流動するものの実体の連続的変化をそのまま連続的画像としてとらえるのがアナログ表現といえます。奈良時代に中国から渡来した絵巻という形式を応用し、独創的な絵画メディアとして考案したのが平安時代の日本人です。その世界にはアナログ表現が典型的に披瀝されています。

一枚の長い巻物の中に、物語の時間的経過を長尺の空間を駆使し、たくみに処理する技術は、絵巻独自の手法として「異時同図法」や「すやり霞」とよばれていますが、これは現代の映画やテレビなどの映像における動画表現に匹敵する迫力と真実性があります。十二世紀後半に制作された『伴大納言繪』は、史実にもとづいた物語自体のドラマ性、日本の絵巻に特有の空間構成、一大スペクタクルともよべる三次元的な画面展開など、実際に豊富な芸術的内容に満ちた傑作です。

したがって、美術鑑賞や学術研究の分野においても、書籍や雑誌などの冊子でこの絵巻の画面を見ても不充分です。絵巻という形式で見ることによって、はじめてその真価と真髄に触れることができるのです。

◎平安朝の権力闘争

この絵巻の主役には、大納言・伴善男、左大臣・源信、太政大臣・藤原良房、右大臣・藤原良相の四人がいます。複雑怪奇に絡み合った利害関係があり、そこには古今東西の歴史においてくりかえされ、今日の政界にも顕著な闘争とスキャンダルの原型があります。

野心家で才気に富み、出世街道を駆け上るもの、政敵も多い伴善男。最大のライバルであつた源信を放火犯

による影響が絵巻にも強くなります。

実際の「応天門の変」は九世紀におきた政治事件ですが、この『伴大納言繪』が描かれたのは十二世紀後半です。当然のことながら、絵師は九世紀の有職故実や風俗を考証し、参考にしながらも、画面には絵師が生きた十二世紀後半の現実が表現の根幹になっています。その証拠に、貴族や武士同様に庶民のすがたが生き生きと描写されているのを見逃せません。

文芸、演劇、映画などにおいて脇役は主役同様に重要な役割を演じます。ただ、絵画の世界においては基本的に画面という制限もあって、脇役は十分に活躍する場を得ることは困難でした。しかし、絵巻という時間的経過と空間の表現を可能にするメディアのおかげで、脇役にもその場をあたえられたのです。それには、庶民という階級そのものの胎頭を無視できなかつた歴史的背景がありますが、脇役としての庶民の登場によって、内容的にも厚味をまし、連続する画面の要所に新鮮な躍動感をかもし出すことに成功しています。貴族、武士に加え、庶民が面目躍如たるところに、『伴大納言繪』の見所もあります。

◎注目すべきモブシーン

『伴大納言繪』には、四〇〇人あまりの人物が登場します。この人数は当時の絵画表現としては画期的な出来事ともいえます。後年、都市・風俗の屏風などには多人数の町民が描かれますが、これは個性のない人物が情景の一部をなす点景としての配置であり、物語の趨勢を決定する要素としてのキヤラクターとしてではありません。

この絵巻には、上中下のそれぞれの要所に、人物群の描写がドラマチックに配置され、盛り上がりを見せていました。上巻では、紅蓮の炎を上げる応天門の前後に右往左往する人びと、中巻では七条通りで喧嘩を見る群衆がいます。

政治権力をめぐる物語の劇的効果をいつそう高め、画面上にも確固とした立体的構成をあたえています。

こうした集団の人物配置は、まさにハリウッド映画の大作に不可欠な要素といわれるモブシーン(Mob scene群集場面)を連想させます。映画でのモブシーンは何百何千という群衆の躍動感ですが、日本映画には伝統的にモブシーンが極端に少なかったことを考えると、十二世紀後半のわれわれの祖先がすでにモブシーンを自由に演出し、スペクタクルな画面を創造していたことは驚嘆に価します。



出光美術館
Idemitsu Art Museum

出光興産の創業者・出光佐三によって、一九六六年に開館。彼が七十余年かけて収集した美術品の公開と伝承を目的としたもので、東洋美術を中心とした絵画、書跡、陶磁器、茶道具の収藏品は一千点を超える。国宝『伴大納言繪巻』をはじめ、江戸時代の禅僧仙崖の書画から現代の板谷波山の陶磁器にいたる、厳選された名品ぞろいで有名。東京のほかに大阪、門司に美術館、また中近東美術センター(東京都三鷹市)がある。

所在地
東京都千代田区丸の内3-1-1 帝劇ビル9階

下巻

三十一・五 × 九三・七 センチメートル

伴大納言による応天門放火を口にした舍人は検非違使府に連行され、放火事件の取り調べをうける。いつしか季節は美

として貶めようと策謀した事件が「応天門の放火」といわれていますが、その真相は不明のままです。その伴善男に抵抗勢力として立ちはだかつたのが、時の実力者であり、若年の清和天皇にもうとも近かつた藤原良房です。実務家の政治家であつた藤原良相は良房の弟でありながらも、伴善男にも敵対しない、という日和見的な態度に終始したといわれ、そうした相関図が背景にあります。

絵巻の最期で、伴善男は放火犯として逮捕され、失脚するのですが、この事件ののち、藤原良房の藤原北家は専横体制の基盤を築くわけですから、その権謀術策でもつて事件を画策した張本人かもしれません。こうした権力闘争を念頭において、この絵巻の人物を追つてゆきますと、興味は一段とましてきます。

◎重要な脇役としての庶民

有名な『源氏物語繪』や『信貴山縁起繪』は平安時代の貴族社会や僧侶・寺院を主題にしたものですが、十二世紀になると武士階級に代表される新興勢力の台頭

野次馬下巻では伴善男逮捕前後の検非違使の一行など、静動をおりませた人物群となつて描かれております。全巻を通しての計算された人物群が生み出す変化は、この

中巻

三十一・五 × 八五八・七 センチメートル

この絵巻で最初の詞書ではじまり、冒頭の源信邸の場面から「すやり霞」の手法が大胆に採用されている。使者とともにう舍人と童の動きとともに、桧皮葺の屋根の中門から前栽のある中庭へ移動してゆく。応天門放火の冤罪をさせられ、邸の内部では、無罪放免を願つて一心に祈る源信。その奥では、主人の罪を心配して嘆き泣く哀れな女房たち。そして朝廷からの使者の知らせが処罰ではなく赦免であるのがわかつて、事態は絶望から大いなるよろこびへと変わる。蒔絵の硯箱と手箱も異彩を放つている。

長い詞書のあと、場面は一転して棟割長屋のある巷になり、往来で舍人の伴と、伴大納言に仕える出納の伴が喧嘩をはじめ、野次馬の群がりとなる。子どもの喧嘩にそれぞれの親が出て、その行動の推移と時間的経過が「異時同図法」により動画的に表現されている。日ごろから主人の権勢をかさにきて態度の横柄な出納に業を煮やした舍人は、自分が目撃した応天門の真相を暴露してしまう。これが迷宮入りになりつつあった放火事件解明の発端となり、伴大納言の凋落のはじまりとなる。



上巻

三十一・五 × 八三九・五 センチメートル

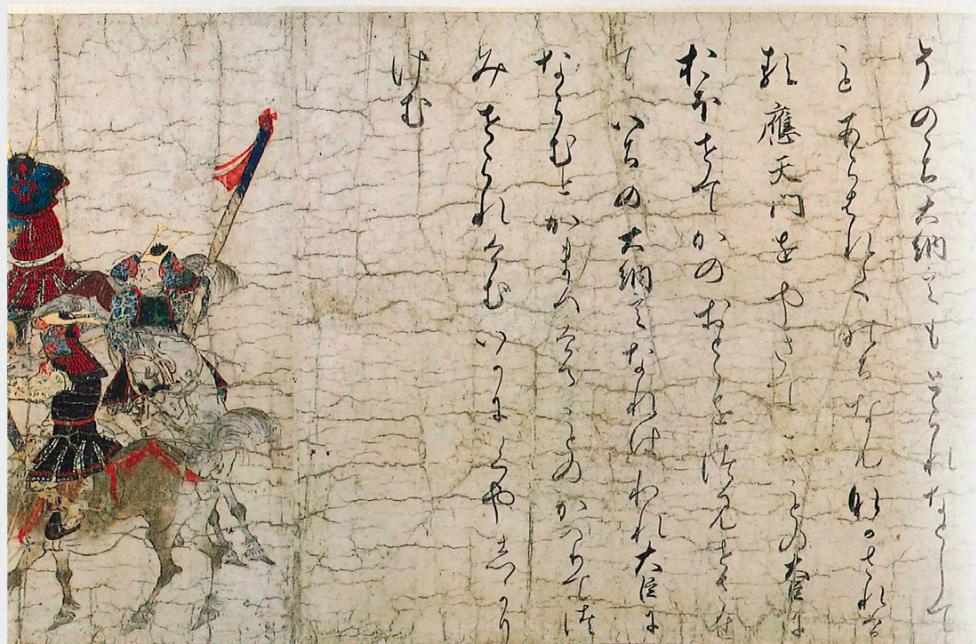
閏三月十日の夜半、大内裏の南の正門である応天門が放火により炎上する。都の警備にあたる檢非違使がたちに出動する。このただならぬ深夜の騒ぎに、公卿も庶民も火事現場に駆けつけ、応天門に向かって走る。

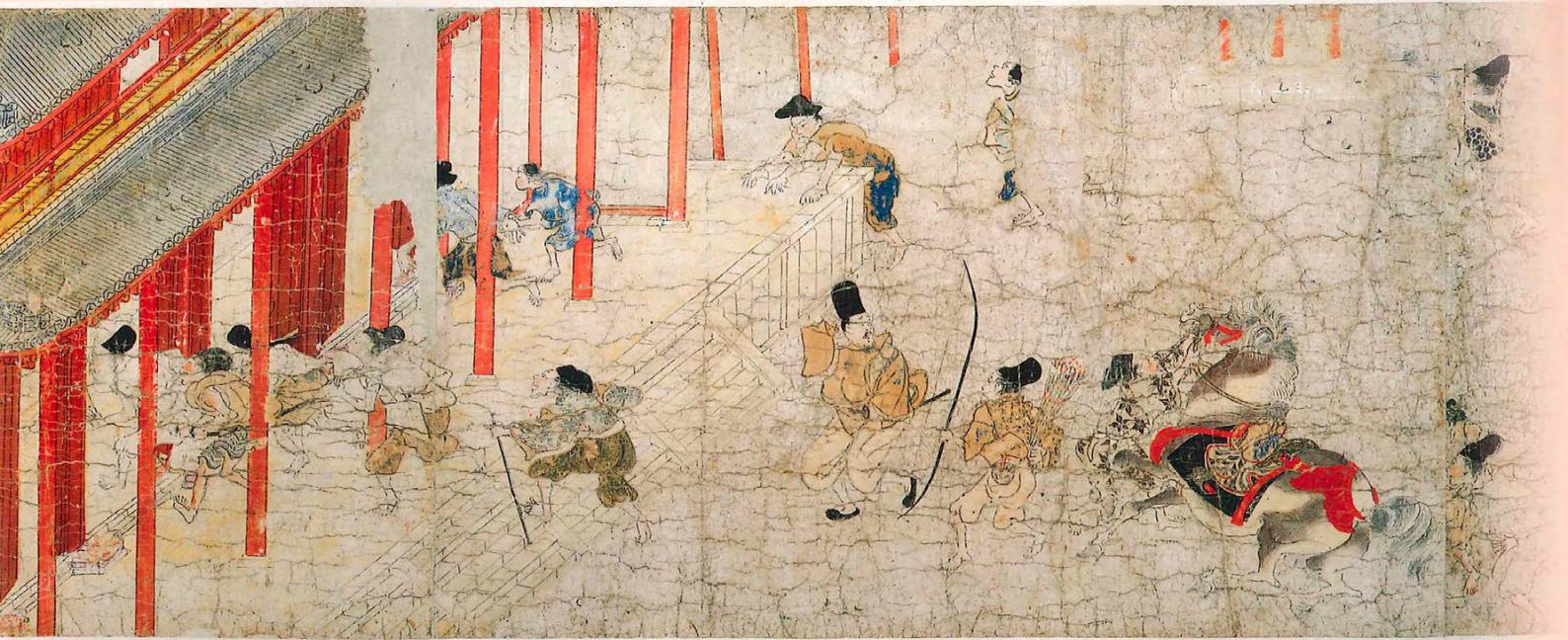
絵巻の右から左へと二線上に位置する朱雀門、応天門、会昌門。風に煽られ、魔の形相のような赤い炎と黒煙につつまれて炎上する中央の応天門。修羅場の様相をきたす風下の庶民に対して、風上でのんびりと高見の見物をする貴族たち。だが、どの頬もみな赤く火照っている。

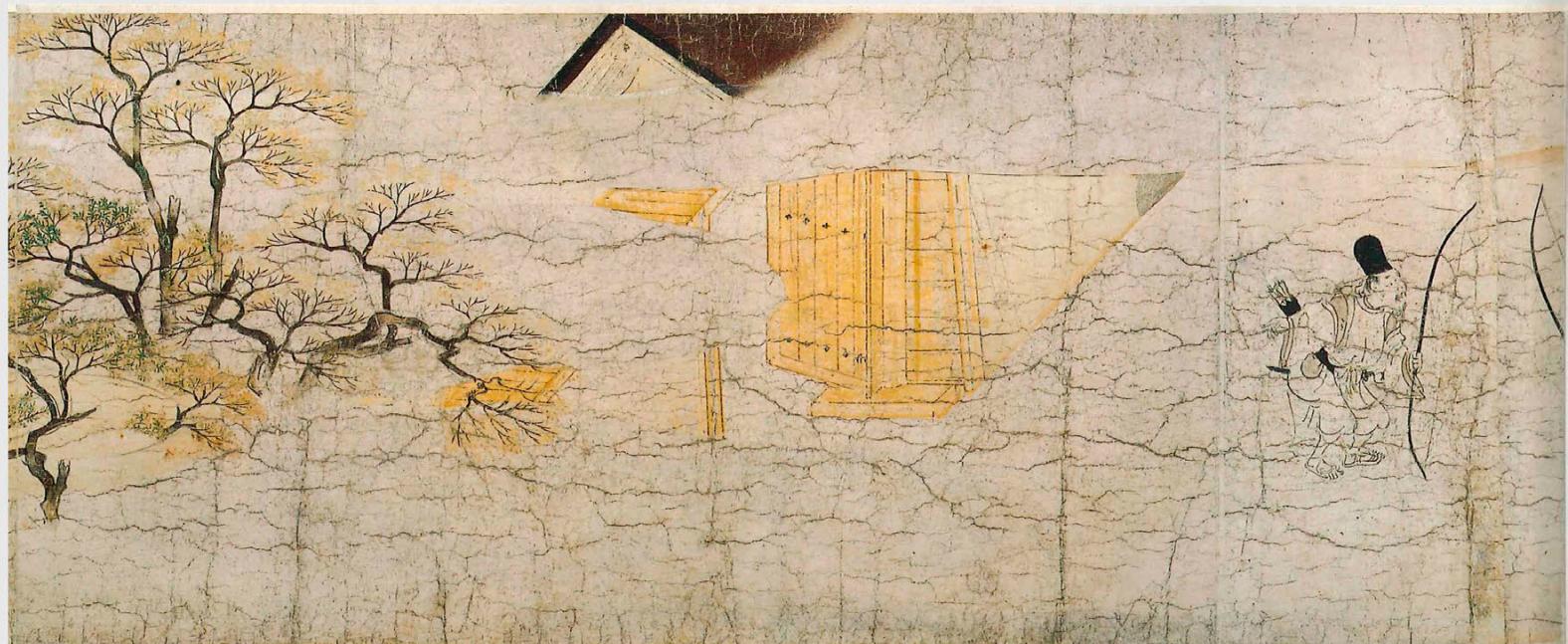
画面はスムースに仁壽殿の屋根が見える地点に移動し、そこに斜めうしろ向きに立つ二人の謎めいた公卿のすがた。これが政敵・源信を放火犯に仕立てた大納言・伴善男か。次に、内裏である清涼殿に場面はうつる。広廟にひざまずく藤原良相とおぼしき公家、源信の弁護のために急いで参上した藤原良房に対する清和天皇。

大納言逮捕のために、隊列を組んで出動する檢非違使の団。弓や太刀を手にするもの、高官逮捕というビッグイベントに緊張気味の騎馬武者と徒歩の随兵たち。やがて切妻造りの門構え大納言邸の総門が現れる。大納言逮捕の瞬間は描かれていませんが、張台構の寝室で伏したままの夫人や泣き沈む女房たちの室内描写がある。朝突如伴家をおそった悲劇を物語ついている。

無事逮捕劇を終え、伴家を意氣揚揚とひきあげる檢非違使たちはリラックスすらしているが、それを門のかけで見送る伴家の家来たちのすがたは哀れみを誘う。一行は八葉車に先導されているが、車の後部からは、うしろ向きに坐られた大納言の左半身だけがのぞいている。その胸中たるやいかに……。









体裁・造本

上卷

卷子表紙——小牡丹唐草紋様 新緞子 卷緒——正絹組紐

中巻

卷子表紙——流れ唐草紋様 新緞子 卷緒——正絹組紐

下巻

卷子表紙——二重蔓唐花紋様 新緞子 卷緒——正絹組紐

共通仕様

桐箱——会津桐 三本入り 印籠仕上げ たとう付き
鬱金包裂——各巻一枚

軸先——なら材花梨色塗装
木吉野杉
金砂子

題簽

秋山光和筆

解説

黒田泰三



黒田泰三（くろだ たいぞう 出光美術館学芸課長）
 一九五四年、福岡県生まれ。九州大学文学部哲学科美学美術史卒業。
 著書に『日本美術全集8 王朝絵巻と裝飾経』（共著、講談社）、『新編名宝日本の美術12 伴大納言繪巻』（小学館）、『新潮日本美術文庫・長谷川等伯』（新潮社）、「アーティストジャバ」・「田能村竹田」（同朋社出版）『アートセレクション』 思いつきり味わいつくす伴大納言繪巻』（小学館）など。

企画製作——トツパン・フォームズ株式会社
 企画協力——MBMグループ
 刊行——丸善株式会社出版事業部
 本体価格——三二八、〇〇〇円（消費税別）

ISBN4-621-04975-5 C1371

お問い合わせ先



MARUZEN-YUSHODO

丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 開発部 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町10-10

Tel: 03-3357-1449 Fax: 03-4335-9419 Email: archives@maruzen.co.jp <http://myrp.maruzen.co.jp/>